
カンダ公の狂気

ルキア・J・クライン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンダ公の狂気

【Nコード】

N3502S

【作者名】

ルキア・J・クライン

【あらすじ】

ボーカロイド主催「ヴェルマニア公の狂気」のD・Grayman
anパロ。

イメージに合わない、パロディーは苦手という方はUターンをお願いします。

アレン女体化。ラビリナ、神アレ。

ネタばれを含みます。

（前書き）

神アレ、ラビリナ、アレ女体化なので、苦手という方はUターンしてください。

エヴィリオス世紀

001年。イヴと呼ばれる女による、誘拐・殺人事件から始まり、「七つの大罪」と後にそう呼ばれるようになった「罪」が起こった。そして、135年後の136年。ある事件が起こる。

ある村で、街で、国である日を境に女が次々と失踪する事件が起きた。

初めは未亡人や若い娘だけだったので、失踪した女の家族が心配するだけでここまで大事になるとは誰も解らなかった。ただ一人、「七つの大罪」を探している魔術師以外は。

「また、居なくなったらしい」

「今度は何処の子だ？」

「隣の村に住んでいる若い妻だそうだ。結婚したばかりで夫と幸せに暮しているのに今朝になって居なくなったことに夫が気づいたらしい」

「あきらめたんじゃないか？」

「いや、俺もその妻を見かけた事はあるがあのか夫婦に限ってそれはない」

「それに最近じゃあ、年齢に関係なく女が居なくなっているらしい。それだけじゃない」

男は声を細めてさらに言う。

「聞いた話じゃあ国中の女や他国の女も何処かに失踪しているらしいぞ」

「本当か？」

「ああ。おかげで女が居なくなつた所じゃ、男ばかり」

「むさつ 苦しいな」

「ははは」

「笑いごとじゃないぞ」

本当に笑いごとではない。風の噂では失踪した恋人を一国の王子が探していると言う噂も訊いた。

「まったく、世知辛い世の中になったもんだ」

そんな噂を耳にしながら、街の酒場で一服している男が一人酒を飲んでいた。

「こんなところに居たのかい？クロス」

この辺では珍しい東国の長身の男が、レッドワイン色の髪をした男に近づいた。

「こんなところとはなんだ。酒を飲んで何が悪い」

「噂を耳にしてるんだろう？調べなくていいのかい？」

男はクロスの隣に座るとマスターに酒を頼んだ。

「フン。調べなかったら、こんなところにいるか」

まだ長さも残るたばこを灰皿に押し付けた。

「やっぱり……この辺なのかい？」

男は声を細めてクロスに訊く。

「ああ、おそろくな。でも、確信がない」

酒を一口飲む。

「その話、俺にも訊かせてくれないさ？」

突然の声に二人は振り向いた。

店の端に座っていた男が二人の後ろに立ってる。

「……何のことだ？」

クロスは怪しいと感じながら男を観察する。

「俺は女性失踪事件の事を調べてる。あんたもそのクチなんだろう？」

男はクロスの隣に腰をかける。

男は10代後半か20代前半の若い男だ。クロスよりも明るめの赤い髪をしている。

「お前は？」

クロスは用心深く若い男を観察する。隣の男も同じように観察している。

「俺はラビ。あんたたちは？」

「……クロス」

「僕はコムイ」

はじめましてさあ。とへにやりと笑うラビ。

うさんくせえとクロスは再びたばこに火をつける。が、火をつける前にラビは火を付けてどうぞ？と出してきた。クロスは一瞬渋ったがここは火を貰うことにした。

「どうしてこの事件を調べているんだい？」

コムイは身を乗り出して訊く。

「理由はその辺に転がってるのと同じさあ。恋人探し」

「居なくなっただのか」

「ああ。もう三ヶ月になる」

「よくそんな短期間でここまでこれたな」

「まあ。いろいろと……そっちは？」

「僕は妹を」

「……似たようなもんだ」

面倒くさそうに酒を煽るクロス。どうやらコムイはラビの話に興味があるようだ。

三人はお互いの持つ情報からやはり神田ユウという人物が怪しいと目を付けた。

三人は考え考えて、男の持つ性癖を逆に利用することにした。

それは……。

「俺が、女装するんさ……？」

「そう。だって僕たちの中で一番若いし、何より違和感がないだろ

うし」

「確かに。俺やコムイじゃあ、気持ち悪いだけだ」

ラビは想像して背中がぞつとした。確かに、爺くさい女や2メートル近い女が居るのは考えにくい。

「……わ、わかったさ……」

ラビはがっくりと肩を落として承知した。

「……じゃあ、そういうことでコイツに似合うドレスを作ってくれるか？」

娘や女房が失踪したという仕立て屋の爺に頼んだ。

「ああ、わかった。そんじゃそこらじゃあ男だつてわからないように仕立ててやる。ほれ、まずは寸法からじゃ」

と爺の意気込みに負けてされるがままにする。

「うう。俺の女装姿なんて、恋人に見られたくないさ」

「我が儘言うな」

「そうだよ。ラビが言い始めたことじゃないか」

「大抵、言いだしっぺがやるよな。こういうの」

「しくしくしく」

やっと終わったのか爺はさっそく作り始めた。

「一晩待ってくれんか？ 絶対に男だとはれぬように仕立ててみせる」

「ああ。わかった」

三人は明日の朝また来ると言い残し、仕立て屋から出て行った。

「……マジ。これ着るんさ？」

早朝、日が出始めた頃。再び仕立て屋に来てラビは絶句した。蒼いドレスが目の前にある。

「どうじゃ？ 傑作じゃろ？ 本当はピンクでも良かったんじゃが……」

「い、いや。これでいいさ！ マジ。これなら絶対にバレナイサ！
」
爺の気が変わらぬ内に着替えねばこれ以上のフリフリでピンクじゃこっちがやられる。

「そうかの？ じゃあまずは基礎からじゃ……」
服を脱げとせかす爺にラビは悲鳴を上げながらどンドン着せ替えられた。

ああでもない。こうでもない。と着せ替えられ小一時間。
やっと収まった。

「ほう。マシになったな」

「これならばれないね」

「そうじゃろ？ そうじゃろっ」

うんうん。とうなずく三人を恨めしそうに睨みつけるラビ。目には涙が溜まっている。

そこには一人の女がいた。

さっそく馬車に乗り込んでカンダ公が居るであろう屋敷に向かった。

「ラビ。先に言っとくけど。絶対にしゃべっちゃいけないからね」

「一発でわかるからな」

「わかってるさ」

キツと決意を新たに前を見据える。

「それから……」

コムイはひと振りの小刀をラビに渡す。

「これには毒が塗ってあるから気をつけて」

「チャンスは一度きりだ。逃すんじゃないぞ」

「わかったさ」

小刀をぎゅっと握りしめ恋人の事を思いながら一人屋敷の中に踏み込む。

「さあ、踊ろうか」

今日もまた美しい淑女おんなが俺の元に訪れる。

微笑みを浮かべる貴女は新しい妻となる。

禁断の悪魔との契約で手に入れたこの「力」

俺を見た全ての女は魅了されて堕ちていく。

女性を魅了する力を手に入れた男は一人住む屋敷の地下室に気に入った女を次々と連れ込みハーレムを作り上げた。

毒を秘めたリビドーの味。突き刺した刃の快楽。血と汗は混じり合い、やがて紫の滴へと変わる。

服を脱ぎ捨てて抱き合えば現実リアルへはもう二度と戻れない。

アスモディン地方における連続女性失踪事件／行方不明者リストⅤ
01・1／

・ルカーナⅡオクト 20歳 仕立屋

・ミクリアⅡグリオニオ 18歳 農民

・ローランⅡイブ 32歳 踊り子

・ミリガンⅡアディ 28歳 占い師

・ハクアⅡネツマ 22歳 無職

・ソニツカⅡソニク 19歳 貴族

・プリエマⅡソープ 30歳 家事手伝い

・リリエンⅡターナ 24歳 パン屋

・テットⅡセトラ 31歳 軍人

燃やした昔の肖像画。捨て去った過去の俺を誰しもがあざけり笑ったあの顔は忘れたい。

傍らの可愛い娘を抱き寄せてキスをする。^{おんな}

彼女はそう、かつて俺のことを馬鹿にした幼馴染^{アレ}だった。

ある日を境にして国中の女がいつしか次々と行方をくらませた。あるものは女房、あるものは娘を失い、途方に暮れた。

闇に染まるリビドーの色。とどまらぬ無限の情欲。
幻想は全てを呑み込み俺はもう「人」ではなくなる。
神に逆らい墮落する。これが俺の望んでた狂気。

アスモディン地方における連続女性失踪事件／行方不明者リストⅤ
01・2／

- ・グミナⅡグラスレッド 21歳 貴族
- ・メイリスⅡベルゼニア 22歳 ベルゼニア帝国第3王女
- ・ミツキーナⅡオルリバ 19歳 未亡人
- ・アンリーⅡスイーツ 62歳 花屋
- ・ネルネルⅡネルネ 19歳 工員
- ・リンドⅡブルム ？歳 修道女
- ・ユーキⅡカイナ ？歳 無職
- ・ジョセフィーヌⅡフランソワ ？歳 ？

・ユフイーナ＝マーロン 26歳 マーロン国王妃

リストに載った連続女性失踪事件。その数は報告を受けているだけでも20人は超えていた。

被害は自国・他国の王族女性までに及び、国際問題に発展しかけていた。

今日もまた美しい淑女^{おんな}が俺の元に訪れる。

さあおいで俺の胸の中に踊ろうかこのハーレムで。

近づいた貴方を抱きしめて微笑んだその瞬間。

突然の鋭い痛みと血に染まる俺の胸。

消えた恋人を探してた若者^{うし}は居場所を突き止めた悪魔の住む屋敷に若者^{うし}は女装して悪魔に近づいた。

そして懐の刀を悪魔に突き刺す。

毒を秘めた刀が刺さり俺はその場に倒れこんだ。

血と汗は混じり合いやがて紫の滴へと変わっていく。

術のとけた女達は全て我に返り屋敷から逃げ出した。

俺のことを一瞬だけ見て最後に屋敷から出たのは……。

待てよモヤシ！ まだお前に「好き」だと言ってない！！

こんなことをしなくても、僕はあなたの事が好きだったんですよ？

一晚経って屋敷に訪れた少女。彼女は幼馴染の少女だった。

冷たくなった彼を抱きしめ少女はつぶやいた。
彼の髪を優しくすく。

苦痛に歪んだ彼の顔は優しい雨で濡れていく。

冷えた床に静かに眠る男。
その表情は穏やかに眠る。

屋敷から出た少女を待っていたのは、恋人を探していた男とその恋人だった。

「アレンちゃん」

恋人は少女に駆け寄る。

「……バカだね。……欲に駆られてこんなこと、するなんて……」
うつむく少女から涙が零れ落ちる。

手にはブローチが握られていた。それは彼がいつも身につけていたもの。

さて、この物語はここでいったん終わりますよう。

悪魔に売ってまで手に入れた力。それは果たして本当に手に入れたかったものだったのでしょうか。

今ではもう解りません。

しかし、彼が少しでも勇気があれば、もしかしたら……。

ここでキャストをお送りいたします。

神威がくぼ役、神田ユウ。

M E G U 役、アレン・ウォーカー。

K A I T O 役、ラビ。

巡音ルカ役、クロス・マリアン。

初音ミク役、リナリー・リー。

オリジナル役、コムイ・リー。ブックマン。

ボーカロイド、歌：神威がくぼによる「ヴェルマニア公の狂気」の
パロディーをお送りいたしました。

全員「……………」ありがとうございました！……！」「……………」

おまけ

アレン：「やっと、終わったあ……！！！」

リナリー：「お疲れ様、アレンくん！」

ア：「ホントですよ」

コムイ：「リナリー…… 神田君になにもされてないかい！……？？」
「」

リ：「私はね。でも……」

神田：「おい、モヤシ。これからちよつと付き合い」

ア：「え？ え？」

アレン、神田に連行される。

（後書き）

駄目文を読んいただきましたありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3502s/>

カンダ公の狂気

2011年10月8日18時47分発行